

(134) 群馬県沼田市の赤沢鉱山

群馬県桐生市立図書館で、郷土資料書籍棚を閲覧した。群馬大学教育学部紀要の目次をめくって、表題が「群馬県片品村赤沢鉱山からトパーズ含有鉱石の発見」の参考文献(1)を目にした。2012年発行の紀要であり、捨てられた旧鉱山を紹介している文献としては、著者の知るところ極めて新しいものであった。また、「トパーズ」の単語が目も引いた。文献では、群馬県内の忘れ去られた小規模の旧鉱山「赤沢鉱山」のズリで採集した多くの標本の分類・分析の結果を紹介していた。論文中には当鉱山の位置が、近傍の幾つかの旧鉱山名と、それらの位置と共に、地形図中に書き込まれてもいた。それらの中に、根羽沢鉱山もあった。金鉱山であった、この根羽沢鉱山についての著者の探査記は既報である。参考文献(1)中の地図で、書き込まれた根羽沢鉱山の位置は、著者が探査で確認した位置とほぼ一致していた。これに信をおいて、本参考文献を手引きに、赤沢鉱山の探査を行った。幸運にも、初回の探査行で、現地を確認することができた。幾つかの坑口跡、そしてズリ。参考文献(1)によれば、赤沢鉱山の採取鉱種は銅・鉛・亜鉛であった。ズリには黄銅鉱、閃亜鉛鉱、黄鉄鉱、硫砒鉄鉱が豊富であった。なを、本文の表題に記されているように、微小ながら、トパーズ含有鉱石があると。岩力のある人ならば、ルーペを覗きながらのトパーズ標本の採集は容易かもしれない。著者には未だ未だ無理であるが。

実際において、本鉱山のズリから採集できる鉱物種については、参考文献(1)と共に、院生が修士論文として書き上げた参考文献(2)がより詳しい。文献(1)は文献(2)を、紀要論文として短縮したものであるから。

現地には、それほど危険が無くたどり着けようが、何度か沢を渉らなければならないので、沢の水量が多いときは注意が必要である。

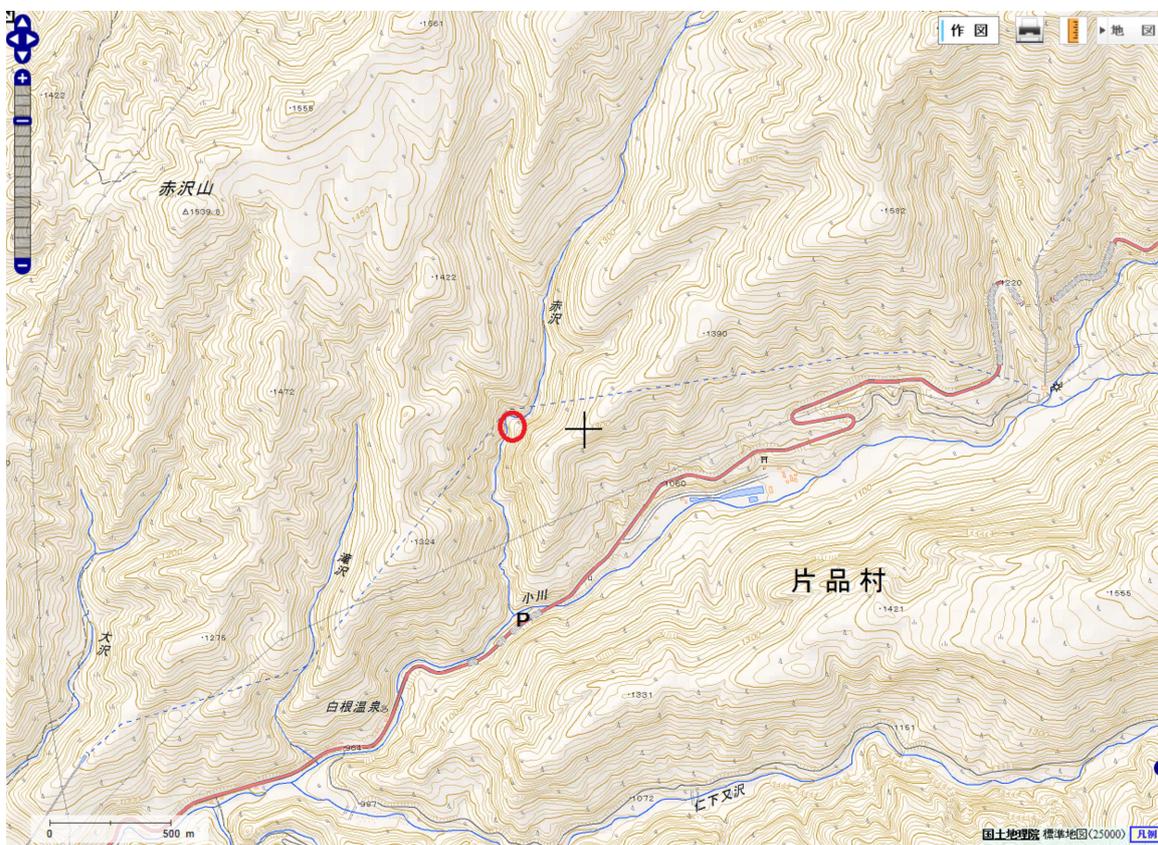


図1 国土地理院の地図サービスより複製掲載。地図の左下は片品地区方向、右先は丸沼・金精峠・日光方向。赤丸が赤沢鉱山跡。Pが駐車場所。

現地への経路は次の通りである。関越道を沼田ICで降り、日光・尾瀬を目指し、120号を東に進んでいく。片品地区では、大清水方面ではなく、日光方面に向かって、120号を先へと進んでいく。白根温泉を過ぎると、幾つかのスノージェットを通過することになる。このスノージェットの所で左側、道路と沢の間に、幾つかの適当な空き地がある。周りに全く人家が見当たらないのに、「赤沢」のバス停留所もある。支流の赤沢が、本流である大滝川に合流している当りの空き地が、駐車には1番好都合かもしれない。図1中に文字Pを記している。ここから赤沢を遡ること、約1km未満で現地にたどり着く。現在でも、幾つかのしっかりした鉄製の橋、吊り橋が沢に架かっている。また沢脇には、コンクリートで固められた石垣でできあがっている道が生きている。所々で崩壊はしているが、現地まで石垣道は続いている。探査は4月後半であった。沢には未だ残雪が所々に厚く残

っていた。

ところで、疑問に思ったのは、これらの道や鉄製の橋が赤沢鉱山のために造られたとするには、あまり崩壊もしていないし、朽ちてもないのである。赤沢の入口に、看板があった。写真2参照。「赤沢ダム」があり、その流量が変わるらしい。増水に注意するように、との掲示板である。とすると、この赤沢の上流に、「赤沢ダム」があることになる。しかし、今回の探査行では、現地までの沢に、そのようなダムを確認してはいない。現地よりさらに上流にあるのであろうか？ あるとすれば、建設用の資材などはどのようにして運び上げたのであろうか。

因みに、最新の地形図には、赤沢にダムらしいものは全くない。また、Googleなどで現地付近の空撮映像をモニターしてみた。赤沢に沿っては、識別できるようなダムは見当たらなかった。どうなっているのであろうか？

探査日 2014年4月

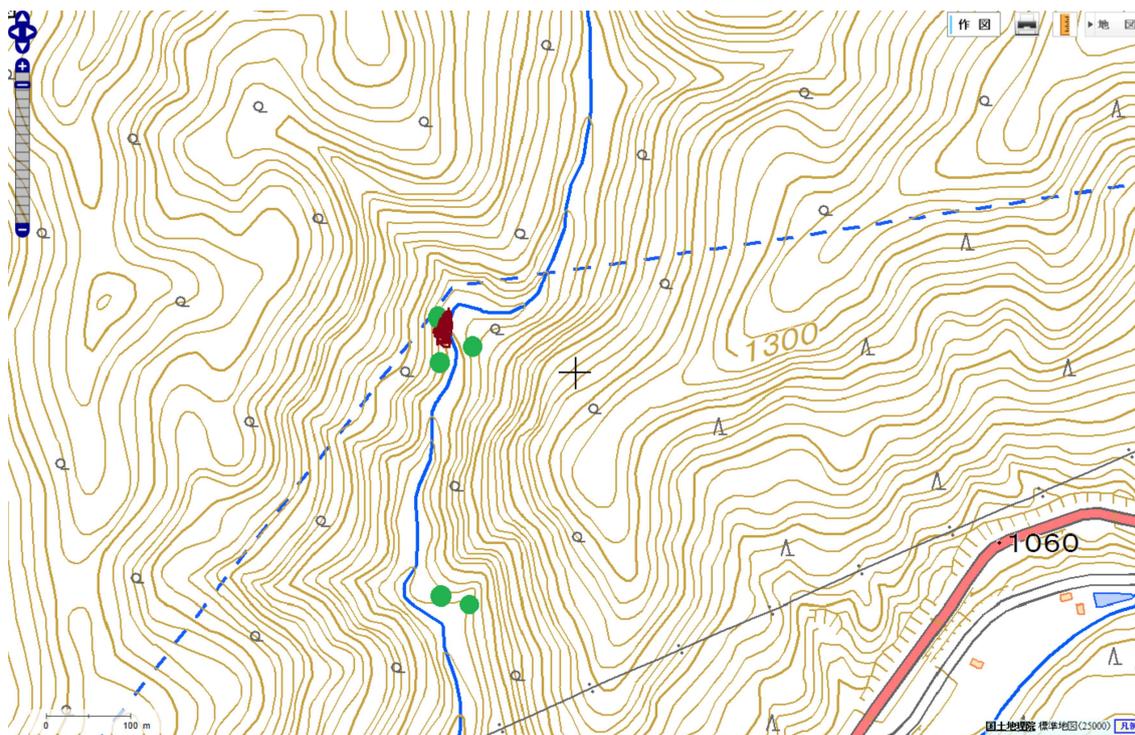


図2 図1の部分の拡大図に相当。黄緑丸が坑口跡。茶ベタがズリ。現地までの沢に沿った道は所々で消えているが、それほど不安を持つことなくたどり着けよう。後掲の写真を参照。沢の水量が多き時には渡河に注意。

鉱山跡写真



写真1 120号を日光方面に向かって登り上がってきた。この先は丸沼。赤沢近傍の、幾つかのスノージェット（道路の上に屋根状に設置されたコンクリート製防雪・除雪施設）の間の、左側に、適当な空き地がある。



写真2 駐車場から沢に向かって降りてきた。手前が上流、向こうが下流。左上に120号の路壁が見えている。大滝川に赤沢が合流するところにあった掲示板。「赤沢ダム」が明記されている。しかし、今回の探査行で、「赤沢ダム」らしいものは確認できなかった。現地の更に上流にあるのであろうか。とにかく、現時点でも、写真中央に見えているように、大滝川に架かっている鉄橋は生きており、沢水に入ることなく、これを渡って赤沢に入っていく。

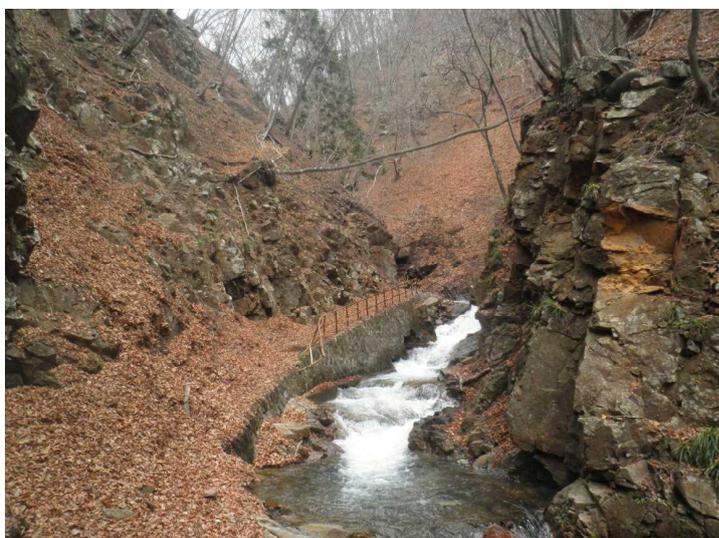


写真3 支流の赤沢に入って程ない地点で。赤沢の外観の一つ。落ち葉に埋もれているように見えるが、沢脇に石垣組道が付いている。手すりもある。



写真4 途中にあった立派な鉄製の吊り橋。それほど古くはないようである。何の目的で設置したのであろうか？赤沢はハイキング・コースには適地かもしれない。特に紅葉時期に。



写真5 鉄製の長い渡河橋が生き残っている。探査時期は4月末であった。沢に次第に残雪が目立ってきた。



写真6 現地。赤沢の右岸にあった坑口跡の一つ。写真中央部には、大きな岩塊があり、その下部から水が流れ下っている。流域が赤茶色に着色している。銅鉾山の古い坑口でよく見られる光景である。この写真では隠れて見えないが、岩塊の左脇には坑口跡らしいものもあった。なを、右下の白い部分は雪渓である。



写真7 写真6から少し上流側に、あった坑口跡。写真中央の落ち葉に囲まれている小さい黒い穴。穴の下は、ズリが一杯である。が、大半は残雪で覆われていた。雪渓は谷を跨いで覆っていた。このような雪渓の上に立つのは気分が良い。昼食とした。



写真8 写真7に示している坑口に近寄った。その内部の様子。入口部に土砂が堆積して、排水が滞っていた。



写真9 沢の左岸にあった、他の坑口。



写真10 写真9で示している坑口の内部の様子。こちらの坑道は支柱もなく、非常にしっかりしている。坑壁は鉱染状岩石のようである。



写真10 幾つかの坑口のあった場所より少し上流。水に隠されているが、鉄製の渡河橋が対岸に向かって延びている。これより先は、残雪が谷を埋めており、1回目の探査行は、この直ぐ先で終了した。

鉄製渡河橋があるということは、この先に「それなりの物」があるということを示している。

この先に、「赤沢ダム」があるのかもしれない。或いは他の坑口などがあるかも。次回の探査では是非この先に行ってみたい。

鉱物写真



写真11 ズリから取り出した大きめの石を破断。鉱染状の破断面が見える。黄銅鉱、黄鉄鉱、閃亜鉛鉱の微結晶が散らばっていた。写真に撮っただけ。

参考文献

(1)「群馬県片品村赤沢鉱山からトパーズ含有鉱石の発見」、吉川、真崎、小林、群馬大学教育学部研究紀要 自然科学編、第60巻、15頁～25頁、2012年。

(2)「群馬県片品村赤沢鉱山の鉱物と鉱床に関する基礎研究」、真崎翔太、群馬大学大学院教育研究科、修士論文、2010年。補記 この修士論文は、群馬大学中央図書館に在庫である。